



言葉凸凹 襲の色目と、織りの色目

平安時代の文学の中に、頻繁に「襲の色目」が登場する。「重ねの色目」とも表記される。

古語辞典によると「衣服を重ねて着る時の表裏の、また上下の色の配合。男子の衣服の直衣・狩衣・下襲では表裏の染色の配合をいい、女子の五衣・単、重ね袷などでは上下の重なった色合いをいう。また、懐紙の表裏、糸の縦横さらに上から下までの一揃いの衣服としての色の配合をさすこともある。

男女とも季節によって使用する色合いにきまりがあり、また、同じ色でも季節によってちがう名で呼ばれたり、同じ名でも衣服の種類により違う色合いをさしたりすることもある。

「織の色目」とは、上記の「糸の縦横」に当たるもので、布を織る時の、縦糸と横糸の色の組合せを言う。

かさねの色目の著名な研究者の長崎盛輝先生は上下や表裏、縦横に用いるような二色配色の場合は「重ねの色目」を、五衣のような多色配色を指す場合は、「襲の色目」を用いるとよいと書いておられる。

平安の宮廷における女子の正装は、何枚も重ねた袖口、裾、裾などの色の重なり的美しさが競われ、重んじられた。

(永田泰弘)

言葉凸凹 染料と顔料

物に色を付ける物質を色素という。色素以外で発色する構造色などもあるが、単純に布や糸にしみ込ませたり、反応させて色をつける場合や、物の表面に固着させて色の層を作る印刷インキや塗料のような工業的着色方法に限定して考えてみよう。

工業的な色素は、水や油に溶ける色素を染料と言い、溶けない色素を顔料と言う。

現代のように化学合成によって染料や顔料が作られる時代より古い時代では、染料は藍、紅花、茜、紫草、梔子、鬱金、貝紫、コチニールなど、自然界から採取されていた。

染め方は、糸や布を染料溶液に浸して染める浸染か、型版と色糊を使う捺染が使われた。顔料も自然界から集められた。

白土、黄土、赤土、紫土、天然朱、鉛白、鉛丹、緑青、金青など、全て鉱物由来の色素である。これらは、粉末化され、水や油を混ぜて絵具や塗料として使われた。

上記のほとんどの色素は、明治時代以降に化学合成により工業化が進み、現在の化学染料や有機顔料、無機顔料となって、過去には見られなかった高彩度の染色品や絵の具、印刷インキ、塗料などの色材を生み出している。

(永田泰弘)

●大辞泉ひろいよみ 63 ーく

紅絞り：くれないしぼり。紅色の絞り、べにしぼり。

紅裾濃：くれないすそご。袷の襲や鎧の威などで、紅色を上を薄く、下の向かうにつれて次第に濃く配色してあるもの。

紅染：くれないぞめ。紅で染めた色。また、その染めもの。

紅匂：くれないにおい。襲の色目の名。襲の衣の上から下へ紅をしだいに濃いものから薄いものとする。

紅の薄様：くれないのうすよう。紅色の薄手の鳥の子紙。

紅の装束：くれないのしょうぞく。成人の用いる単や袴などの色を紅にした服装。

くれないのなみだ：紅涙を訓読みにした語。

くれないのは：紅の葉。紅葉を訓読みにした語。もみじ。

くれないのはかま：十二単などの女房装束で、成人女子が用いた紅染めの袴。緋の袴。

くれないのふで：紅の筆。軸の赤い婦人用の筆、転じて恋文。

くれないもみじ：紅紅葉。女房の襲の色目。紅・山吹・黄・青・濃紅・淡紅の順に重ねるもの。

クレパス：クレヨンとパステルの両方の特色を合わせた棒状の絵の具。商標名。(永田泰弘)